

放射線化学の学問性を求めて、 「教科書」との日々。

北里大学
丑田 公規



「教科書（既刊「放射線化学のすすめ」）」の構想は、大学院生の頃、若手の会で同世代の皆さんと意思ついで盛り上がったときに遡る。そのとき師匠の志田先生に「放射線化学会は単なる予算を取るような寄り合いで学問分野としては存在しない」と言われて反論したことがあった。その後この学会で35年間過ごして見聞きしたことを経ても、「学問分野としての放射線化学とは何か」を考えると今も時々ある。

上記「教科書」で河内さんと2人で書いた9-1の10ページが「学問としての放射線化学」を短くまとめたものつもりだ。当時世にあった書物には誤りが多く、2人で式を点検しながら苦勞して完成させた。一番参考にしたのは、新実験化学講座の志田先生の記事だったから、上記のご発言も十分裏付けがあるのだが、私自身はその先生に低学年で習っていたことなので「ジョーシキ」のつもりだった。しかし「教科書」発刊当時の学会では、内容を知らなかったり、ぴんときななかったりする人が多く、結構がつくりきたものである。同時期に学会誌で井口先生の連載もあったのだが、どちらに対しても「degradation spectrum って何？」みたいな空気もあり、どうなっちゃったんだ？と冷めた暗い気持ちになった。昔、先生の言っておられたとおりだ、とも思っ、学生時代から一周回って考えあぐねることになった。

皆口を揃えて「生き残るのは大変だ。」といい、「加速器ぶっ放して、なんかやってたら放射線化学」なのか？ そう思えなかったし、ぶっ放す既得権もなかったもので、学会から足が遠のくことになった。昔は「放射線を使ってないので放射線化学ではない」などと言われることはなかったはずだ。「論文になる」「予算が通

る」だけでは学問はどこかに行ってしまう。先生が言いたかったのはこれかと今になって思う。

今、私は他の学会、たとえばMRSが主戦場だが、精力的な研究者が、水和電子の反応を研究されていて「これ放射線化学じゃないの？」という内容を見かける。学会に引っ張りこもうとしたことも何度かあるが、素直に来てくださることが少なかった。そして彼らの方がどんどん先に進んで行ってしまった。受入側もすでに「〇〇って何？」の学力不足なので魅力がないのは仕方がない。元祖を名乗っていても、そこにめざましい利用価値というか、知的valueの輝きを見いだされ、尊敬されなければ、手にした学問はさび付き、学問でも学会でもなくなるのだと思う。

賞改革の時も主張したが、学会活動についての、目的意識、学問的価値、インパクト、たとえば論文のバリューには、神経をとがらせて欲しかった。学会で若手を育くむべきだという老人は、既得権を守りたいだけである。若手がその魅力ある分野に夢中になり、若手が勝手に育ち、私のような老人を押しつけてしまう環境を作るべきなのだ。

出版社が廃業するトラブルもあり、「教科書」は消えてしまった。小嶋さんが許諾を取って集めてくださった画像をもう一度集める気はしないし、何よりも「フクシマ以降」にはふさわしくない部分もある。一方でフクシマ直後に発売された他の本から、私の書いたカラー図を使いたいと言ってきたことがある。何かと思ったら2章の図2で、そもそも私たちがよく見かけるスパーク構造の絵であった。古いアルバムのポートレイトを1つ拝借します、というTV番組みたいな扱いなのか。放射線化学の古いポートレイトがこれか、と言えば、いいオチなのかも知れない。

「教科書編集」は、いい思い出で、市川先生をはじめ執筆の際にお世話になった皆さん全員との熱い討論や熱意、またご褒美に学会特別賞を頂戴したことに感謝したい気持ちは変わらない。この場を借りて、この全ての皆さんに再度お礼を申しあげたい。

Exploring the Academic Status of Radiation Chemistry: Days of "The Textbook" and Ourselves.

Kiminori USHIDA (Kitasato University),

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1 北里大学理学部

TEL: 042-778-8314, FAX: 042-778-9953,

E-mail: ushidak@kitasato-u.ac.jp